

# 大新一教私争の更なる發展へ向けて

明大教育研究会

大新開争報告、學業學ヒヨウ等講習統決起集  
會に召集されたすべての學友諸君、教育研究  
會より、この間の我々の大新開争に対する開  
り方を述べつゝ、大新開争と我々の現在展  
開せんとしている教私開争との関連性を明ら  
かにし、校友諸君に開いへの決起を呼びかけ  
ていいことだと思います。

大新開争は、一日有余にわたり、理事會當  
届の新開會に対する、運の及ぎ方に抗し悔や  
れこしたのだけれども、その以テキが明らか  
にハレンチなものであり、MUD共應と理軍  
會との討論においてもそれが明らかにされて  
いたにとかかわらず、MUD共應自身の物理  
的影響の弱さをみと理軍者達は既にといふ形  
で協議の収束を企てていた。との過程の中で  
我々教育研究會は、大新開争連絡會議に召集  
してこひつたのであります。

最初の段階に於いての我々の大新開争に対  
する周辺には、基本的には「助つ人勝手」の感  
を出さなかつたのだけれども、しかしロガラ大  
陸開港に觸れり、商業介入等とくつ連日中で、  
この明大新開にかけられた彈圧がたゞたまか  
けられたものではなく、明治大學・學生をよ  
り強く効動的に管理していく、それにつきり  
は、學生されざれど我々の諸個人の個体性進  
歩の過程において判断していくことによつて  
つきるのだけれども、過去における明大開争  
が、ある側面として全其開Mといふ層の生  
徒組織M即開性にアシテするものとしての新  
たる人開關係の創出という開争の展開があつ  
たように、再びあのような開いの姿がもえあ  
がることを恐れこいる当員が、學内のメディ  
アリ大新の独占を企てることによってそへ接觸  
を行わんとするための明大新開に対する彈圧  
があつたといつて明るくにゆつていつ  
しがあろう。との過程で我々教育研究會とい  
う存在、とてことのよのよ不滿を大衆化し  
て、それを力とみなせないものとして各種サー  
クルを開催している、といつておつかの事か  
べしと開催している、といつておつかの事か

クルの存在に対する批判として我々が明大開  
争に際してナーケル解体論へといつて形で明ら々  
にしこいる問題との同質性と一種定義性など  
り、我々はこのよう自身をもつて自分の志を  
くじられ、分断されてゐる、そして現状の接  
触の補完物としてのナーケルを解体へ止揚し  
ていくことは、大新開争に圍つて  
いく事にあらうという形で、大新開争を一定程度  
復讐つてこいつたのであります。そして、大新  
開争は、10対理軍會團交における理軍事の自  
己批判、新開會營理運営の獲得、といふ  
形で段階的な批判的反対に遷したのだけれど  
も、したしながら二の弾圧ないままで述べて  
来たように、學内における、學生同の品も太  
き方の重形態を奪ふうというものであつたと  
いう事であり、それに抗して戦つた部分、大  
新開争連絡會議に召集する部分が初期阶段段  
階では運動的開い、つまり「守る」開いであ  
つたのが、開いの中で、そのような彈圧の實  
を確認するうちにいわゆる「ノーディア」の革命  
から革命のメティア」と過るの時大新開の產  
物の中立性を廢棄して開う節々へと形成され  
てき、それはつまり、我々の新たなる父通  
形態の獲得といつてこことにつきるのだけれども、  
そのよのよなことが明確化された現在において  
は、この大新開争は今後絶りをつげようとい  
ていい、それはつまり、我々の新たなる父通  
といつてこことな神認づかるのである。

そして二つ目、我々教育研究會は教育連絡

會議の設置、機能化を図る中でそれに召集し  
教取課程の授業に入れて討論會を継続して  
行つてこいのだけれども、このいわゆる教點  
開争は、教取課程の三不教授なる人物が今ま  
全く空洞化してこいる所の対応、教基法を告じ  
されを教取課程履修者におしつけ、夏の教員  
との矛盾、つまり、教授の二面性を追求する  
者を云々と懇諤してこいる所から問題になつて來  
たのである。つまり、三木教授の書いている  
本リ講義の内容と三木教授の具体的行動など  
をハサウエ代價させるためにあるナーケルと  
ナーケルの存在 자체に対する疑問、つまり  
開争における標準のつまらぬ、逆にひどもの  
あるのだと、ということを明るくにゆつていつ  
しがあろう。との過程で我々教育研究會とい  
う存在、とてことのよのよ不満を大衆化し  
て、それを力とみなせないものとして各種サー  
クルを開催している、といつておつかの事か  
べしと開催している、といつておつかの事か

まことにこの間一直して休講とし、そして名

文新開學會解体斗争勝利。

廻説者に対して手紙を送り、出席表を回収し

文教取扱争勝利。

ナラとしておこなうだけれど、このかつて

文口アクト体糸解体。

形で現在具体的な手がない限り廻しとして文教

文館體解体争勝利一團體自主實業運動會

團體は行われてゐる。

主要に我々が二つの團體の中でやること

文教學會上に値上げ阻止。

ものは、現実より遙離した概念的考査などを粉

MULLO

碎する中で、教育と我々のものとしないこと

文口アクト体糸解体。

しつことあり、それはつまり現状の教育と

文館體解体争勝利一團體自主實業運動會

学生とどう一方通行の關係をかえることであ

文口アクト体糸解体。

り、我々学生相互間の關係を追求へ変革して

文口アクト体糸解体。

しくということである。それはすぐから公

文館體解体の方向性として位置づけられる

であつた。

このよう鳥取私自身は大新聞等を提起して

文口アクト体糸解体。

テニイ「メティアの革命たらまぐのメティ

文口アクト体糸解体。

アヘ「読み書き、書き手の変革」という二つの

文口アクト体糸解体。

具体的内実、つまり媒介としてあつたうど

文口アクト体糸解体。

考えるのです。この問題はいまだ明確ではな

文口アクト体糸解体。

いので今後この問題を明確にしていくとい

文口アクト体糸解体。

つかしながら二つの教取團體は今秋における

文口アクト体糸解体。

學に値上げ阻止に対する皆への強い敵となる

文口アクト体糸解体。

うとも考えるわけです。つまり取團體

文口アクト体糸解体。

とは、それは公教直體系解体への方向性をも

文口アクト体糸解体。

つけであり、その内容形成としてあるわり

文口アクト体糸解体。

であり、それは學に値上げ阻止の向いを「學

文口アクト体糸解体。

ヒが知らぬい」と二つを上なるらまくいレ

文口アクト体糸解体。

等の六法論的問題に終始しながらも、さ

文口アクト体糸解体。

らに、「問題は、二つのよつて教取自体がおな

文口アクト体糸解体。

しいことである」という、より深化させた廣

文口アクト体糸解体。

への進展の方向を示す廣いとして教取團

文口アクト体糸解体。

争などの内容性をもつてじるのでないかと

文口アクト体糸解体。

考えるわけですが、そしてその内容性の具体的

文口アクト体糸解体。

提示は今后の教取團體の發展のいかんにのみ

文口アクト体糸解体。

つてこいと言えるであろう。

文口アクト体糸解体。

すべての学友諸君の教取團體會議に窮屈して

文口アクト体糸解体。

教取團體を廃しめたいと思ふ。以上をもつて、教取團體會議にアッピールに  
文口アクト体糸解体。